

GHQ 勤務日本人検閲者のデータベース—漢字名の判明した数百名の多様な証言

< 史資料解説連続講座 (4) >

山本武利 (NPO 法人インテリジェンス研究所理事長)

2014年5月31日

1、最近の成果——延べ1万4千人の日本人検閲者の発見

- 東京 CCD のデータベース作成、公表
- 新たな追加名簿 東京 CCD 1948年12月分
- 福岡 CCD 1945年12月分約300人の名簿 —— 道正誠之、檜崎弥之助の名
- 同 組織表、職名説明データ
- × 東京への偏り、占領初期の少なさ

2、英字記載名簿解説の困難性——表意文字文献からめざす漢字表記をどう確定するか

- 博識、追跡力を持つ木村洋氏の全面協力で、検閲者多数の実名（漢字名）確定とかれらの証言記録を多数発見、入手。
- × 山本独自の発見10件以内。NHK 発見ゼロ。

3、検閲者証言の断片

- 1、*柴崎宗佐 大正6(1916) GHQ 上級翻訳官のかたわら横浜中央陸軍教育専門学校でスペイン文学、アメリカ文学を研究後にマドリッド大学へ留学。日本翻訳家協会会長など。佐藤勇夫『新版英語と日本詩人』北星堂書店1983、486頁
47年9月29日就職、48年6月 DPS Sr Ex Tr
- 2、英子・アドナン・クマス、神戸生まれ、「終戦直後に大阪の進駐軍検閲部で翻訳の仕事」
インドネシア人と結婚、インドネシアで染め折り展を開く 毎日東京、1999・2・18
- 3、いぬい とみこ 大阪梅田の CCD (占領軍の電話検閲の仕事)「処女作のころ」『鑑賞日本現代文学』
- 4、檜崎弥之助 (代議士)「一九四六(昭和二十一)年の初め、まだ二十五歳だったと思います。旧制福岡高校時代からの親友佐伯五郎君も宮崎の陸軍基地から復員して仕事を探していたので誘って検閲支隊に出向きました。支隊の拠点福岡市天神にあって、博多駅の近くでも、接收した建物二棟を使っていました。同じような仲間が約百人。旧制中学の英語教師をしていた人などが通っていました。仕事はその日の新聞などの、指定された個所だけ英訳すること。手紙も英訳させられました。封を切って翻訳した後はまた元に戻し、「検閲済み」というゴム印を押しました。連合軍は、民主化が進んでいるか、反連合軍的な動きはないか、などを探りたかったけど、仕事があるだけありがたかった。なにより自由な雰囲気よかった。』『遺言・檜崎弥之助』2005
- 5、*浅川昌文、東大、通信病院「手紙を読むのも最初のうちは熱々のラブレターなど面白いが十日も経つと無味乾燥で一日が退屈である。そこで職種を変更しようと思いついた。今までは初級検査官

(JUNIOR・EXAMINOR)で読むだけであったが、見付けたものを翻訳する検査翻訳官(EXAMINOR・TRANSLATOR)になれば張り合いがあると思い和文英訳の試験を受け職種変更をした。おまけに一〇%から三〇%までの初級、中級、上級語学手当(ラングエジ・アローワンス)が支給された。こんなことなら最初から語学試験を受けておけばよかったと思った。「進駐軍の郵便検閲の思い出」『通信協会雑誌』2009・6

48年4月12日就職、48年6月 Jr 2790円 48年9月 Ex Tr 3540

6、児島英一、近畿日本ツーリスト社長「戦後、GHQの民間検閲局でアルバイトをした金をはたいて路傍でマンドリンを買いもとめた」「随想私の趣味 音楽とは感動を求める心」児島英一『経団連月報』1990・6

7、*鈴木泰次郎(進駐軍検閲部、清光産業をへて三菱商事)『東京製綱株式会社七十年史』144頁
46年3月18日就職、Tech Exp (Finance) 48年9月 5830円 49年9月 8920円

8、*岡野直七郎、1921年東大卒、東京信託勤務、「昭和二十年十二月、進駐軍検閲部に入る。のち第五及び第九課長(中略)進駐軍に就職してより約二年間、無欠勤なりしを以て1箇月の休暇を与えられる」『岡野直七郎全歌集』1989

45年12月10日就職、48年6月 DAC 4310円

9、池田早苗(東海観光社長、大正11年(1921)生まれ、一橋大に1946年復学、
「学資稼ぎに始めたのが、東京中央郵便局でのアルバイトです。当時GHQが手紙を検閲していて、不審な手紙について調べていた。その翻訳の仕事を東大や東京商大、津田塾の学生が駆り出されていたわけです。私は英語が得意な方でしたので、仕事は楽でしたね」『財界』1985・12・17

10、鈴木茂男「日米の狭間に生きた30年」「私は非常に運がいいというか、やはり友人の伝手でGHQのなかのCCD(民事検閲局)のなかのPPB(新聞・出版・放送部)というところで私が配属されたのは、新聞の事前検閲を行うところでした」『文藝春秋』にみる昭和史 第3巻、576頁

11、市井三郎『市民の論理学者・市井三郎』1945年9月、23歳「進駐軍占領下でもあり学業は放棄し、上京してGHQの科学論文検閲官となる」

12、*島田滋(1885~1954)元外交官、エストニア代理大使、進駐軍翻訳官(高知県人名事典1999)
48年・6月名簿に記載

45年5月24日就職、Sr Ex Tr 48年6月 3770円 49年9月 7190円

13、阪田こと子(大阪、堺)「電話局にて盗聴の仕事に従ひき手紙の盗聴ありし戦後を」
「役に立つ報告したる記憶なし二世のオフィサーと並び盗聴せしも」『新アララギ』1999年9月号

14、光岡良二(1911)1935年東大文学部西洋哲学科中退、新日本文学会会員
「CCDへ来て、私は知的失業者群の膨大な数にあらためて驚いた。紡織機に向う女工のように向い合って二列にデスクに坐り、一日中他人の信書を開封し、占領政策にとって必要な情報を翻訳する巨大なメカニズムの歯車。こんな仕事は長く続ければ続けるほど、品性下劣になるほかはないと思われた」『北条民雄』1981

15、河野六郎(大東文化大学教授)「CCDにしばらくいたが、この仕事はあまり愉快的なものでなかったもので、早くぬけだしたいと思っていた」「照宏先生のこと」『渡辺照宏著作集第7巻』月報、1982

4、梅崎光生の CCD との関わり

- 1912年生まれ、直木賞作家梅崎晴生の実兄、東京文理科大学中退、出征、捕虜。復員、復学下村寅太郎教授の下で哲学の卒論に向う。1946年ごろ「書く為には先ず生きなければならぬ、生きる為には食わなければならぬ、と思ひ到った。当時日本に進駐していた米軍は、日本国民の動向をさぐる為に、接收した中央郵便局で、手紙の検閲を行っていた。あの頃、手紙あるいは葉書の表にペタッと検閲済みのハンコが押しあつたアレである。私は恥をしのんで、かつて戦った米軍に使われに行った。その合間に悪戦苦闘して、卒論にしてはまことに貧相な、レポートに毛の生えた程度のものでっち上げて提出した」「不肖菲才の一弟子の記」『下村寅太郎著作集月報9』1993・8
- 「仕事場は丸の内中央郵便局三階の大広間であつた。細長いテーブルが数十並び、夫々のテーブルに DAC（監督官）と PPC（連絡係）、それに十二名の検閲者がとりつき、巨大な水槽の中の稚魚群が餌に群がる如きだるい雰囲気の中で、無表情に手紙の閲読、翻訳をしていた。ともかく敗戦後の日本人の思想や動向を占領軍 GHQ に密告する言わばスパイみたいな仕事だったので、一人一人の心の底に忸怩たるものがへドロの如く沈殿していただであらうことは想像に難くない（中略）ともかくこのアメリカ女の監督の下に、その指図に従つて仕事をしなければならぬということに、まず抵抗というよりは屈辱に似たものを感じず。」梅崎光生「矜持と虚妄」『三田文学』1972・7—CCD 体験とフィクションをまぜた 20 ページの体験風小説
- 梅崎の後輩小宮山慶三郎氏の調査協力では 1946年某月～1947年3月ごろまで CCD 勤務。卒業後都立高女教諭 10年間、1961年日本女子大付属主事 2001年逝去、88歳、著作『ルソン日記』沖積舎、1987

5、証言の評価基準

体験評価の 2 分化

- 多数派 —— 検閲体験肯定派
 - 法学、経済学部 —— 高度成長の担い手
 - 英会話能力の習得 —— 新制大学の英語教師への転出
- 少数派 —— 検閲体験否定派、反省派 —— 左右のイデオロギー、ナショナリズム
 - 奴隸的職場、DAC による監督・監視
 - 占領下日本人の旧敵国へのインフォーマントとしての自覚、恥辱
 - 憲法違反、倫理違反の信書開封、情報窃取行為
 - 文学者、文学部
 - 嫌な職場 —— 梅崎光生、甲斐弦、阪田こと子（新アララギ）
 - 福田恆存遺族の『週刊新潮』コラムへの抗議
- 無感覚者
 - アルバイト感覚
 - インテリジェンスへの接触意識ない

性差からくるもの

- 女性 経験としての評価、高給、物資扶助への実利感覚
女性職場の広がり
楽しい体験 ——男女差なし、実力主義
- CCDの廃止 ——戦前からの男優位の職場の復活—高度成長の夫を支えた専業主婦

時期による変化

- 民主的な職場からインテリジェンス的閉鎖・管理機構への変貌
——冷戦にともなうGHQの右傾化
- 高給、生活安定で雇用者の倫理観の破壊、羞恥心の喪失

年齢による変化

- 日本全体での政治・経済・文化のアメリカ化の進行 ——敵国アメリカへの反発の減少
- 過去の不愉快さの忘却

6、エリートの供給源？ ——江藤説への疑問

- 戦前からのエリートの組織は軍隊以外は温存された ——CCDに勤めると出世を逃す
- 45、46年の資料が福岡CCD以外は不在であるが、48、49年の資料では独立後日本を担った超エリートは見当たらない
「Kisoshita Junji」(木下順二?)には色めくが、年齢が合わず、別人らしい
- 大学時代の経験はそれほど大きくない ——復員者、陸軍経理学校などの出身者は大学に入学しながら、CCDにアルバイトとして働き、卒業後にエリートに向う

7、インテリジェンス研究から見た検閲体験者の証言

- 数万の検閲体験者 ——アメリカ民主主義の影を浸透させる核となる
- DACより上の実態はブラックボックスの闇で証言者の視野は狭い
- 重要な職場であったTOSの雇用者の証言なし。ウオッチ・リスト関係者も無言
- 左藤恵のような逡信省キャリアでさえ職場に近づけないし、システムを理解できない検閲の闇
- フローチャートの中での TOS(Technical Operation Section)と IRS(Information and Records Section)の位置 ——検閲インテリジェンスの中核
- 45年12月という早い時点から秘密インキの存在に気付く。高級での雇用700—1500円。46年7月CCD月報では、登戸研究所(陸軍第9技術研究所)の秘密インキ検査技術をひそかに吸収し、手紙検閲からのインテリジェンス吸収の最大化を図る。

8、この個人情報の公開の方法

- 日本年金機構の対応
終戦処理費（賠償金）から支出されていた検閲者給与
記録が年金機構で所有することが確認 ——情報公開要求への回答
——2人の検閲者の証言
- どこまで公表すべきか
第1次公開 2014年5月
第2次公開 2015年 漢字名判明分、1948年12月分、
福岡1945年12月分
20世紀メディア情報契約者のみ対象
自ら語った人は公表してもよいのではないか